

A surreal, low-angle shot looking up at a circular library with high wooden shelves filled with books. Numerous open books are floating in the air, creating a dreamlike atmosphere. The lighting is warm and focused on the floating books.

マニュアルという幻想

マニュアルは、
責任を手放すために発明された幻想である。

人はいつからか、
生き方や振る舞い、美しさにまで
「正しい手順」が存在すると信じるようになった。

それは知恵ではない。
判断を引き受けないための構造である。

これは、ルールや基礎を否定する話ではない。
学習や反復の価値を軽視するものでもない。

また、「自由にすればいい」という
責任放棄の肯定でもない。

マニュアルは本来、
危険を避けるための仮の地図だった。

だがそれが、
「守れば評価される形式」へと変質したとき、
領域がすり替わる。

生き方や佇まいにまで、
再現可能性が持ち込まれる。

マニュアルが機能するのは、
結果ではなく「責任の所在」を曖昧にできるからだ。

従っていれば、
外れても「正しくやった」と言える。

だがその構造に依存した瞬間、
その人は評価される側に固定される。

なぜなら、
判断が外部に委ねられている限り、
その人は「基準を持つ側」には立てないからだ。

中央にいる人間は、
マニュアルに従っていない。

必要に応じて参照し、
その場で更新し、
最終判断を自分で引き受けている。

評価される側は再現する。
評価する側は判断する。

この差は技術ではなく、
立ち位置の違いである。

型は必要だ。
だがそれは、思考の起点にすぎない。

型をなぞることと安心するか、
型を踏まえた上で判断を選び取るかで、
その後の軌道は分岐する。

洗練とは、
整った外形ではなく、
判断の連続によって滲み出るものだ。

そしてその判断は、
誰にも委ねることができない。

マニュアルに従う限り、
その人は安全に生きられる。

だが、
安全であることと、
選ばれることは一致しない。

A hand holding a black pen is writing in a notebook. The notebook is open, showing text in German. The desk is cluttered with various items: a small potted plant, a cup of coffee, several other notebooks, and a pair of glasses. The scene is lit with warm, natural light from a window in the background.

判断を引き受けている人間の前では、
人は、無意識に姿勢を正す。



Edition — 価値観の航路
別景：マニュアルという幻想

著者：美学思想家 古川玲奈
発行：Raffiné
2026